

令和元年度 白石町立福富小学校 学校評価結果

資料

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
ふるさと福富を愛し、誇れる子どもの育成 ～「考える 思いやる きたえる」子ども～	1 学力の定着 2 仲間意識の向上 3 挨拶・返事の徹底

達成度	A: ほぼ達成できた B: 概ね達成できた C: やや不十分である D: 不十分である
-----	--

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価							
① 児童の思考力・表現力を高め、基礎基本の確実な定着を目指す。							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力の向上	基礎基本の定着	・CRTでの評定1の割合を30年度よりも減らす。 ・学習課題を明確化し、分かる授業を目指す。 ・児童の家庭学習の取組率を90%以上にする。	・朝の時間(ドリルタイム)の充実を図るため、速読集を購入し、取組ませる。読み、書き、計算を継続して行う。 ・西部型授業を行う。 ・児童の習熟度把握のため基礎学力テスト、検定テストを実施し形成的評価を充実させ、再テストを行うなど個別指導に生かす。 ・通級指導、TT指導の打ち合わせを事前にし、計画的に個別支援を行う。 ・「家庭学習1・2・3」を配布して、保護者に啓発する。 ・保護者に学習状況を説明し、家庭学習への取組の協力をお願いする機会を増やす。	B	・1～4年生までは音読集、5,6年生は速読集を使用して、ドリルタイムを行ってきた。クラスによっては毎日音読を行っており、読む速度がはよくなっていると感じられた。 ・学期末の検定テストや長期休みの後の基礎学力テストを行うことで、基礎・基本が定着し、学習状況調査でものびが見られた。 ・通級指導、TT指導などの個別指導が充実していることにより、生活が落ち着き、学習へ向かう態度が養われた。 ・家庭学習への取り組みは、全校の平均が86.2%であった。読書や宿題のまちがい直しなどを推奨し、家庭学習への取り組みを90%以上にしていきたい。	・音読集はこれからも継続的に使用して、読む力をつけていく。 ・家庭学習の定着を図るために、①定期的に学びづくり便りによる啓発、②学習ふりかえり週間の結果を教師間で共通理解する、③朝会など、子供達とも結果を共有し、次の目標をもつなどの改善策が考えられる。
	●教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	ICTを利活用した授業の充実	(図書館教育) ・学習センターとして、調べ学習ができる環境作りを行う。 ・一人あたりの図書貸出数低学年「150冊」中学年「120冊」高学年「100冊」を目指し、読書習慣の確立を目指す。	・家読の充実のために、家庭との連携を行う。 ・調べ学習に適した書物の充実と図書館の環境整備を実施する。 ・全校読書、読み聞かせの充実を図る。 ・創意ある委員会活動を工夫実践する。 ・「本を読みたい、本を借りたい」図書館の環境作りを行う。 ・朝読書の習慣化を図り、親書の心を育む。	B	・家読週間を2ヶ月に1週間設定することで、家庭と連携して家読に取り組めた。取り組み状況は増えてきたが60%前後だったので、80%以上にしたい。 ・調べ学習の図書を学級に貸し出したり、ゆうあい館等の校外施設とも連携して書物を準備して環境整備を行った。 ・図書館まつりを年2回、ポップや放送による定期的な本の紹介等を行い、本への興味を持たせた。 ・朝読書は定着してきたが、学年に適した本を選ぶよう啓発していきたい。 ・今年度の貸出冊数達成率は、低学年90%、中学年96%、高学年71%だった。	・家読週間、全校読書、朝読書を継続し、図書に親しませる。 ・学年に適した本、いろいろな分類の本を読めるように、本の紹介等を行う。 ・貸出冊数が向上するように、本の持ち帰り呼びかけ。
	●教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	ICTを利活用した授業の充実	・ICT機器を使った授業を実践することで児童の興味・関心を高め、理解力や表現力の育成につなげる。 ・教職員のタブレットPC利用のスキル向上を目指して、年間5回以上のタブレットPCを活用した授業を行う。	・ICT機器を利用し、児童の実態に即した教材や資料を準備したり、教材提示の仕方を工夫したりする。 ・ICT利活用を行った授業を授業参観で公開する。 ・タブレットPCを活用する教科や単元を明確にし、計画的に実施する。タブレットが来る週には、授業で活用するようにする。	B	今年度より、タブレットPCが児童用40台、教師用1台が配備され、各教科において活用することができていた。時に体育のマット運動では動画を撮影し技能を高めるなどの有効な活用例もあった。また、令和2年度から本格的に始まるプログラミングに備え、研修会を2回持ち、実際に操作することで教師の指導力の向上を図ることができた。	・新しい学習指導要領に向けて、教科書が新しくなると共に、GIGAスクール構想など新しい課題に対応できるように、今ある40台のタブレットPCとソフトを活用できる研修を行う。 ・今年度5・6年生は必ず算数の図形についてプログラミングソフトを用い学習する。 ・ネット社会に対応すべきリテラシーと共に、外部講師による研修会や、日頃の道徳などの教科を活用し、情報モラルを家庭と共に学び続ける必要がある。

② お互いのよさを認め合い、互いに学び合いながら、仲間意識を育てる教育活動の推進を目指す。							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●いじめの問題への対応	いじめを起こさない教育環境の整備	・教育相談、道徳教育、人権・同和教育及び生徒指導等との連携を図りながら、いじめを起こさない、いじめを許さない教育環境の整備をする。 ・いじめ防止基本方針に基づき、覚知から認知、さらに解決に導くための組織的な対応の具体化を図る。	・定期的に(2ヶ月ごとに)「こころのお天気」アンケートを児童に実施する。気になることについては担任による教育相談を行い、必要に応じて支援会議を開き、具体的対策を講じる。 ・「気になる子」に関わる情報交換を毎週水曜日に行う。 ・Q-Uアンケートを実施し、結果分析を行い個々の支援に活用する。 ・特別支援・通級についての啓発活動を学級ごとに1学期と2学期に1回ずつ行い、継続的な指導を行う。	A	・定期的に(2ヶ月ごとに)「こころのお天気」アンケートを児童に実施したことで、早期に子どもの気持ちに気づき対応することができた。随時、担任による聞き取りができた。 ・毎週情報交換することで、全職員で児童についての共通理解ができ、有効な声掛けなどができた。	・年に一度は、教育相談週間を設け、自分から相談できない児童とも話す機会を設ける。 ・担任と連携し、カウンセリングの必要な児童・保護者把握して、スクールカウンセラーと日程を調整する。
	●心の教育	道徳教育の充実	・豊かな心と道徳的実践力の向上を目指す。 ・道徳教育の充実を図るため、授業公開を年間計画に位置づける。	・学級の実態に応じた道徳の時間の充実を図るとともに、保護者や地域の方に、年1回は「ふれあい道徳」の授業を公開する。その際、授業のねらいや計画を事前に配布し、啓発を図る。また、授業の様子を学校ホームページに掲載する。 ・ワークシートや年間指導計画を活用し、家庭や各教科との関連を図る。 ・授業で使用したプリント等のポートフォリオを行う。また、資料等については、道徳用の棚を用意し、いつでも活用できるようにする。 ・「考え・議論する道徳」の学習を重ねることで、お互いの考えを認め、学び合う経験を積ませる。	B	・学級の実態に応じて、授業の中に児童の活動を数多く取り入れ、学び合いを行なうことができた。 ・ワークシートを作成する際に、心情曲線などの図を用いて、心の変容が分かるような工夫ができた。	・ワークシートや挿絵などの教材を共有化することにより、授業の向上を図る。 ・道徳教育推進教員が中心となり、職員研修等で実践事例を紹介する。
	○人権・同和教育	人権学習の充実	・計画的な人権学習の充実を図り、一人一人を大切にする集団づくりに努める。 ・人権・同和教育の内容を地域や保護者に伝える。	・8月に平和集会、12月に人権集会を開く。それぞれの集会前後には、平和や人権に関する授業を実施することで、平和や人権を尊重する態度を育てる。 ・集会後には、「平和学習だより」「人権学習だより」を発行し、保護者、地域の方に集会の内容や児童の感想などを知らせる。また、学校ホームページにや学級通信に掲載し、保護者への啓発も図る。 ・職員の意識を高めるため、人権や同和教育に関する職員研修を実施する。 ・地区同研提案の「一人1レポート」の実践に全員が取り組み、実践交流を行う。	B	・人権集会を授業参観日に行なったことで、保護者への啓発の一助となった。 ・平和集会など、全校で人権や平和について考える機会が何度もあり、児童の意識を高めることができた。児童同士の意見交流も考えを深める手立てとなった。	・保護者の参加を促すために、計画的に内容を検討し、保護者への早めの呼びかけを心がけ、家庭との連携を強める必要がある。 ・児童が自分事として捉え、考えることができるように、児童の生活と結びつめられる話題を精選していくことが必要である。
	○特別支援教育	特別支援教育の充実	・課題と対策を明確にし、個に応じた支援のあり方を考え実行する。	・子どもを知る会やケース会議を行い児童の実態や支援について共通理解をする。必要に応じて外部機関(医療・福祉)との連携を図り助言をもらう。 ・チームで支援を行うための校内支援体制を確立する。 ・「個別の指導計画」に合理的配慮事項を明記し、それに基づいた支援を行う。 ・発達障害に関する研修や啓発を行い、理解を深め支援に役立てる。	B	・子どもを知る会は、年間を通して計画を立てて実践したことで、支援の必要な子どもについて全職員で共通理解をすることができた。 ・医療機関での支援会議に参加するなど、関係機関と連携をして児童の支援に当たることができた。 ・問題行動に対しては、ケース会議等も行い、対策を考えて関係職員が協力して対応することができた。 ・特別支援教育についての研修会を2回(夏季休業中、特別支援学級授業研究会)実施したことで、特別支援教育への理解を深めることができた。	・特別支援教育についての理解は少しずつ深まってきているが、まだ個人差が大きい。今後も継続して研修をする機会を設けて、深めていく必要がある。

③ 自分の健康や体に関心を持ち、規則正しい生活習慣の定着を目指す。							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○危機管理・安全教育	安全な教育環境の整備	・保護者、地域の方々、関係団体との連携による安全教育の実施。 ・様々な危機に対応するマニュアルの整備。 ・安全点検の充実。	・保護者からの事前情報や事実を把握し、学校の実態に応じた危機管理マニュアルの見直し、作成を行う。 ・体験活動、訓練等を通して様々な危険予測および危機に対応できるようする。 ・月1回の安全点検の徹底。安全点検に挙がってきた内容については、早めに改善を進めていく。また、計画的に改善計画を立てていく。	B	・年度当初、交通安全教室を実施し、学年に応じて、道路歩行時の安全について、また、自転車乗車時の安全について指導を受け、交通ルールと学校の約束事の理解と確認ができた。 ・学校内での児童のけが等防止に向けて、施設面での安全点検の充実と即対応、児童への安全指導の徹底、さらには危機管理マニュアルの周知を行っていく必要がある。	・安全点検に上ってきた内容については、早めに改善を進めていく。また、計画的な改善計画を立てていく。 ・地域の老人クラブ(福富あいさつ隊)に登下校時の児童の安全を見ていただく、挨拶を交わしていただく等の協力要請をする。下校時刻の変更等は、前もって確実に知らせておく。 ・地域の安全を把握するために、PTAとの連携の中で情報の共有に努めていく。
教育活動	●健康・体づくり	健康で規則正しい生活の習慣化	・元気な挨拶ができる児童を目指し、挨拶運動や日常の挨拶指導を充実させる。 ・手洗い・うがい・歯磨きの励行を図る。 ・早寝、早起き、朝ご飯の推進を行う。	・朝の挨拶運動を定期的に行う。 ・日常的な挨拶の励行を学校が一体となつて行うとともに家庭にも呼びかける。 ・家庭、学校での歯磨きの状況の把握及び保護者への啓発をしていく。 ・給食後の歯磨き指導の徹底を図る。	B	・委員会活動の取組の1つとして挨拶運動を行うことで、児童の挨拶に対する意識が高まった。 ・校内では挨拶ができる児童が増えてきている。また、地域や家庭で自分から挨拶をすることができる児童も増えてきた。 ・歯磨き指導は染め出しなどを家庭でも行ってもらうことで毎日の歯磨きの仕方を児童だけでなく保護者の方にも見直してもらったいい機会になった。	・学校と家庭で一緒に挨拶ができる児童を育てていこうという考えを継続して学校便り等を使って呼びかけていく。 ・学校生活の具体的な事例を写真や動画などで分かりやすく児童に示すことで、生活のめあてについての意識を高めるようにする。
		体づくりの推進	・外遊びの推進をする。(体育委員会との連携) ・体力向上に努める習慣を確立させる。 ・マラソン大会やがんばるマラソン週間を設定し、体力向上や健康な体づくり意識を向上させる。	・体育委員会による各種スポーツ会への参加を呼びかける。 ・スポーツチャレンジへの参加等屋外で元気よく遊ぶよう声かけを行う。 ・学級活動や給食の時間を通して正しい食事のマナーや望ましい食習慣について学校栄養職員と連携して指導する。 ・がんばるマラソンの励行、がんばりカードを作成し、目標をもつて体づくりに取り組ませる。	B	・体育委員会を中心に全校へのスポーツ大会を実施し、体を動かすことへの楽しさを感じさせることができた。 ・全クラスにスポーツチャレンジに挑戦してもらい、記録に挑戦してもらったことができた。 ・学校栄養職員に給食時間に各クラス入ってもらい、食事のマナーについて指導してもらったことができた。 ・がんばるマラソンの目標回数を低・中・高ごとに設定し、達成させることができた。	・スポーツ大会について全校全員が参加できるものではなかったため、来年度は、全員が参加できるような活動を考えたい。 ・運動の機会は設定したが、単発的になるものが多いため、継続的に取り組める機会を考えて設定する。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策
教育活動	●志を高める教育	自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちを高める教育活動の推進	・自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちがあると答える児童を80％以上にする。	・全ての教科等、学校行事等を通して、夢や目標について自ら考えさせる時間や場面を設け、自分の夢、目標を持つことができるようにする。	B	・2分の1成人式や卒業式等で自分夢や目標を発表する場を設け、自分の将来について考え、表現する場を設けた。 ・親の仕事を将来なりたい職業として選ぶ児童が増えた。	・まず、自らの夢や目標をもつために、憧れの存在やモデル像を紹介する。自分の将来にいろいろな選択肢があることを知らせ、自らの夢や目標を実現するためには、今どんなことに取り組むべきかを考えさせる。
学校運営	○地域に開かれた学校づくり	コミュニティ・スクールの実践	・小中合同による学校運営協議会を年4回開催し、会議の充実とともに小中合同の取組を通して連携を深める。	・学校運営協議会では、学校経営方針等理解を得て、地域連携団体との体験活動等を計画的に進めていく。 ・児童の学習や生活の様子を伝えるため、毎月学校便りやCS通信を発行し、地域でも閲覧してもらう。 ・人材バンクを更新し、連絡先、連絡方法等を明確にする。	A	・小中合同による学校運営協議会を計画通り4回実施することができた。会議の内容等については、授業参観をはじめ、学校便りやコミュニティ・スクール通信(きずな)を発行し、保護者や地域の方へ伝えることができた。 ・春の遠足時に小中合同なかよし集会を実施することができた。 ・人材バンクを更新し、次年度以降に使えるような形になってきた。	・来年度も小中合同で学校運営協議会を計画、実施することで児童生徒の9年間を見通した教育について、意見やアドバイスをいただき、実践につなげていく。 ・人材バンクについては、継続的に更新していくとともに、職員間で情報共有していく必要がある。
		家庭、地域との連携 学校からの情報発信	・児童の学習状況や生活の様子を保護者、地域に公開し伝える。 ・地域との連携を深め、体験活動等を通して、ふるさと福富のよさに触れる。	・PTA総会、PTA役員会、保護者会等で児童の学校での様子(学習面、生活面)を随時報告をし、諸行事、活動への協力を早めに依頼する。 ・学校行事については、より多くの保護者や地域の方々に来校してもらうために、参加しやすい時間帯、内容を考えながら早めに通知するなど工夫する。 ・ホームページの内容を確認し、2週間毎に更新する。	B	・学校ホームページで情報発信して学校長便り、学校での児童の様子など定期的に掲載することで毎月の行事を詳しく知らせることができた。 ・給食の毎日の献立を写真付きで掲載し食育の様子を家庭や地域に発信している。 ・新しいホームページになり、スマートフォンでも閲覧しやすい形式になった。	・新しくホームページのアドレスが変更されたことの周知徹底をする。 ・学校緊急メールにて緊急情報を配布できるように100パーセントの保護者の加入を目指す。
	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	校務等の効率化の促進	・各分掌間の連携及び情報共有を図り、効率的な業務への取組を推進するとともに、教職員の時間外勤務について1か月当たり前年度比5％削減する。	・連絡事項については、SEI-Netの学校フォーラムを使用し情報共有を行うことで、会議の時間短縮に努める。1日1回フォーラムに目を通すよう声かけを行う。 ・定時退勤日(金曜日)を設定し、実行する。タイムカード等で退勤時間を確認し、定時退勤できなかった場合は、別日に定時退勤を行うよう呼びかけを行う。 ・各教職員の勤務時間を確実に把握するとともに、特定の教職員に業務が集中しないようにマネジメントを行う。	B	・連絡事項についてはSEI-Netフォーラムを利用して各自がかくにんできるように声掛けを行った。 ・定時退勤日の周知徹底と町内一斉定時退勤日の周知・徹底を行事黒板に示し、促した。 ・各月の業務記録票をプリントアウトし各自で超過勤務時間を意識できるようにした。	・SEI-Netから新教育情報システムに変更になり、フォーラムから掲示板を使うようにしたが、閲覧する職員が減っている。新システムの活用を促す必要がある。 ・職員会議等の会議資料を早めに作成し、事前に目を通す時間を確保することで、時間短縮につなげる。 ・定時退勤日の周知徹底。
4 本年度のまとめ ・ 次年度の取組							
コミュニティ・スクールの実践を継続してきたことで地域の協力を求めやすくなっている。地域の方々との交流や地域の方への働きかけ等を通して、地域の中で育まれている学校の存在を児童および職員が強く意識することができた。学校での取組みや児童の様子を積極的に家庭や地域に向けて学校便りやホームページ等で発信することができた。新学習指導要領(算数)の県研究指定を受け、自分の考えを伝え合う「なるほどタイム」の在り方を探った。まず児童が自分の考えをもち考えを伝えることに慣れてきた。今後は考えの根拠を元に伝え合うようにしていきたい。また、家庭学習についても家庭への働きかけを丁寧に行いながら、確実に取組むことができるように努めていきたい。「自分からすすんであいさつ」、「自分で歩いて登校」できる児童をめざして、学校、家庭、地域が一体となった教育、働きかけを行っていく。							

●は共通評価項目、○は独自評価項目